

飼育体験がもたらす動物園・動物・飼育員に対する印象の変化

Improvement in Images of Zoo, Animals, and Zoo Keepers through One-day Zoo Apprentice Experience

町田佳世子・河村奈美子・酒井正幸・村山政彦

I. 目的

本研究の目的は、動物園における飼育体験が体験者の気分および動物等に対する印象に与える効果を評価することである。研究者らはこれまで、来園者として動物を見ること、また動物に触れることでも肯定的な心理変化が生じることを報告してきた。しかし、動物の生態を間近で経験する飼育体験は、動物園や動物に対する感じ方および体験者の気分により深く影響を与えることが予測される。そこで動物園における飼育体験前後での気分や印象を評価し、飼育という行為が体験者に与える意義を探求したいと考えた。

II. 方法

札幌市内にある動物園の協力を得て、動物園が主催する、大人を対象とした飼育体験（昼休憩を挟み9:00-14:00の間、参加者1名ずつが1名の飼育員について獣舎や放飼場の清掃や餌の準備、餌やりなどの飼育を体験する）の事前・事後に質問紙調査を行った。質問紙は、日本語版 PANAS¹⁾と、SD法による動物園という環境の印象8項目、動物の印象10項目、飼育員の印象の8項目によって構成した。

飼育体験は2009年11月に募集人数10名ずつ2回実施された。参加者の募集は動物園が行なった。調査対象は飼育体験の参加者で本研究の協力に同意を得られた方（回収箱への投函をもって承諾とみなすことを口頭および書面で説明）とした。質問紙は飼育体験の直前に配布し、その場での回答と終了後の回答を依頼した。20名に質問紙を配布し、20名から回答を得た。分析はSPSS (15.0J)を用いて飼育体験前後の各項目の回答の差についてWilcoxonの検定を実施した。

III. 結果

1) 動物園・動物・飼育員に対する印象の変化

動物園環境の印象に関しては、「暖かい」(p=.005)、「陽気な」(p=.049)、「清潔な」(p=.004)の項目において有意な差をもって、終了後の印象に肯定的な変化が認められた。

動物の印象に関しては、「はげしい」(p=.009)、「清潔な」(p=.003)、「素直な」(p=.042)の項目において終了後の印象に有意な肯定的変化が認められた。

飼育員の印象については、「明るい」(p=.017)、「強気な」(p=.032)、「素直な」(p=.013)、「あたたかい」(p=.046)、「活発な」(p=.039)、「陽気な」(p=.010)、「頼もしい」(p=.003)の8項目中7項目において終了後の印象に有意な肯定的変化が認められた。

2) 気分の変化

日本語版 PANAS のポジティブ気分およびネガティブ気分の合計点について、飼育体験前後の比較をしたところ、有意な差は認められなかった。しかし下位項目においては「誇らしい」(p=.019)、

「強気な」($p=.019$) が終了後有意に上昇した。

IV. 考察

動物の印象で有意な差を持って変化があった項目は、動物を見るという静的な活動ではなく、その生態に間近に接することによって感じられた項目であると考えられる。動物園環境については、「清潔な」の変化が大きかった。これは飼育体験の内容に獣舎や放飼場の清掃があり、飼育員の実際の作業や工夫の細部について理解でき、かつ対象者自らも清掃に参加した事が影響していると推測できる。飼育員に対する印象は、「専門的な」を除くすべての項目において肯定的に変化した。これは、ふだん接する機会の少ない飼育員とのやりとりや仕事の仕方を通して、飼育員の知識や人柄に触れたことによって感じた変化であると考えられる。「専門的な」の項目に事前・事後の有意な差がなかったのは、事前の評価がすでに高く、事後もその数値が維持されたことによると理解できる。

気分変化に有意な差がみられなかったのは、そもそも対象者が、多数の応募者の中から選ばれた、動物に対する関心と意欲の高い方々であり、飼育体験前に既にポジティブな気分であったことが考えられる。しかし今回の結果からは、そのような積極的な対象者であっても、動物や飼育員に対する印象は肯定的に変化することが示された。飼育体験が、来園して動物に接するだけでは得ることのできない新たな発見をもたらすものであることを示唆している。

1) 佐藤徳・安田朝子. 2001. 日本語版 PANAS の作成. 性格心理学研究第 9 巻第 2 号 138-139.